

芥川龍之介全集

第8巻

月報 8

昭和40年3月

目次

芥川さんと堀さん……………田中克己

「杜子春」と「杜子春伝」……駒田信二

東京都千代田区
神田小川町2の8

筑摩書房

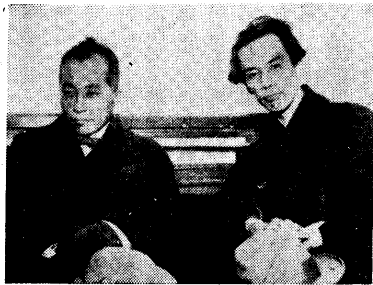
芥川さんと堀さん

田中克己

芥川さんが亡くなられた昭和二年の七月にわたしは中学の四年生で、植物学者になるつもりだった。新聞や雑誌でこの高名な文士の急逝は知ったが、わたしにはそれに先だつ有島武郎の心中ほどには関心がなかったと思う。翌年、高校の文科に入ったのは、亡父に「植物学者では食えないぞ」と止められて、納得したからである。同級はこの年だけ入試に数学を除くという校長の思いつきで、数学の出来ない異類の秀才が集まった。(わたしは地元の関係で、数学があっても受けていたと思う)。その一人に保田与重郎というのがいて、わたしは芥川さんを読んでいないのを知ると、彼は「芥川を卒業しなければだめだぞ」と忠告してくれた。そんなわけでわたしは芥川さんの甥葛巻義敏氏と堀さんとの共編になる、布製の全集を一心に読んだ。わたしの脳裡にはいまも

またたちかへる水無月の
うれひを誰に語るべき
沙羅のみづ枝に花さけば
こひしき人の眼を見ゆる
という絶唱がいまだにのこっている。

昭和九年十月から翌年七月まで堀さんがまた編集した「決定版」をわたしは買いそろえ、編集者の名もおぼえたが、わたしはもう「芥川を卒業した」つもりになっていて、ろくろく読まなかったように思う。十二年に堀さんにはじめて会い、十三年からは東京に移住して「四季」同人として、たびたび堀さんに会えるようになってからも、わたしは堀さんに芥川さんについては何もお話を承わらなかつた。大正十二年に堀さんがはじめて芥川さんに会い、そのあと先輩として関を乞うたのが詩であつたことは、芥川さんの同年十月十八日付の書簡が証明する。また堀さんが小説をかき、それをまた芥川さんに見せたのは大正十四年の七月頃だつたことも同じく同年七月二十日付の芥川さんの書簡で証明される。それに反し堀さんの芥川さん宛の手紙が一通もないのはどういふわ



青函連絡船にて、里見弴(左)と芥川(昭和2年)

ろへ、愛されて訪問を重ねながら、コクトオ、アポリネール、ラディゲ、ジャコブなど当時のフランスの代表詩人たちを訳しつつづけているとしか年譜にはしるされていない。「ルウベンスの偽画(初稿)」——これが芥川さんに示した堀さんの処女作品なのではないだろうか。——は芥川さんの亡くなる昭和二年の三月に「山繭」に発表され、芥川さんはこの前後から死を強烈に意識し、七月にはみずから生を絶つのである。小説家としての両者のおつきあいは本当に短かったといわざるを得ない。

堀さんがもし生きておられたら、わたしがいま聞きたいのは、この短い期間にも拘らない愛された後輩としての思い出

けだろう。堀多恵子夫人に伺いを立てると、「用があればみな直接伺ったからではないかしら」とのお答えであった。この「ハイカラは可成りハイカラだ」との評点に会った堀さんの小説は何だったろう。堀さんの年譜では、このあとも「詩のわからぬ人間たることを公言している」先輩のこと

ではない。最後の発表作として、死を前にして芥川さんの書いた「西方の人」のことである。詩がわからぬことを公言しながら、朔太郎や茂吉を愛した逆説の好きな芥川さんのこれがまた逆説だったのかということである。「わたしはやつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した」というのが、はじめの方にあつて、すぐそのあとに「今日の青年たちには笑はれるであらう」と芥川さんはしるしている。そして「この人を見よ」という第一章は、「激しい日本のクリスト教徒も売文の徒の書いたクリストだけは恐らく大目に見てくれるだらう」と、ちゃんと批判を禁止している。

しかし以下の「わたしのクリスト」はことごとく現在の基督者の容れぬものである。芥川さんはクリスト以前のクリストをみとめ、以後にも多くのクリストをみとめている。これによればクリストは主のひとり子でもなければ、子なる神でもない。もとより三位一体の主でもないのである。意地わるくよめば、芥川さんは自らをもクリストと認めていたのかもしれない。「西方の人」の終章「東方の人」で、老子・仏陀・孔子をあげ、孔子を「支那のクリスト」と呼んでいる。

実はわたしは一昨年秋、芥川さんの言によれば幸福にも宇野浩二さんと同じく発狂した。数日間、意識を失う前に見た幻影は神の下にいならぶクリスト、仏陀以下いくつかの人の影であった。わたしは芥川の影響がこんなところまで及ん

でいたかと、あとで嘆息した。堀さんに会って聞きたいといったが、実はこういことが話したのである。堀さんは芥川さんとちがって、いつも静かな聞き手であったのである。

(詩人)

「杜子春」と「杜子春伝」

駒田信二

「蜘蛛の糸」や「杜子春」を童話と呼んでよいならば、芥川龍之介の童話には、彼の健康な明るい一面が端的にあらわれているのを見ることが出来る。晩年の作品は別として、彼の小説にはもともとそういう一面もあり、それが、童話の場合には率直にあらわれている、といった方がよいかも知れない。「杜子春」の場合を見てみよう。

唐の李復言の『統玄怪録』に「杜子春伝」という物語がある。李復言の伝記はわからないが、玄宗のころ(西紀八三〇年代)の人であったことが同書の記述から推定される。芥川の「杜子春」が、この「杜子春伝」(あるいはこれに類似した説話)を粉本にしていることは明らかで、ストーリーも構成もほとんど同じであり、作品のテーマも同じである。ただ、結末の部分は、ストーリーも結末そのものもちがう。

杜子春は道士との約束をまもってどんな試煉にも耐え、一

言も声を出さない。神将は怒って杜子春の首をはねてしまふ。殺された杜子春は閻魔大王の前で、またさまざまな責苦を受けるが、やはり呻き声一つ立てない。閻魔大王はそこで杜子春を女に生れかわらせる。生れかわった杜子春は、やがて成長して絶世の美人になったが、嘔吐だった。だが、同郷の進士がその美貌に惚れて妻に迎える。夫婦は仲むつまじく暮らし、やがて男の子が生れる。子供は二つになつても口がきけない。夫は怒って、子供の両足を持って頭を石にたたきつけた。子供の頭がくだけ、血が飛び散るのを見た杜子春は、アツと声をあげた。



田端の自宅の庭にて、左から二男多加志、長男比呂志、龍之介(昭和2年)

気がついて見ると、杜子春はもとの雲台峯にいて、道士も前にいた。「お前は喜・怒・哀・懼・悪・欲の六つには勝てたが、愛には勝てなかつた。もしお前が声をあげなかつたら仙界へ上れたのだが、仕方がない。お前はやはり俗界にいるがよい。元気でな」——道士はそういって杜子春を帰ら

せた。その後杜子春は道士との約束をまもれなかったことを恥じ、もう一度やってみようと思つて雲台峯へ登つたが、そこにはなにもなかった。

以上が「杜子春伝」の後半の荒筋と結末である。芥川の「杜子春」ではこの部分がつぎのようになってゐる。

杜子春は仙人との約束をまもつてどんな試煉にも耐え、一言も声を出さない。神将は怒つて杜子春を突き殺してしまふ。殺された杜子春は閻魔王の前で、またさまざまな責苦を受けるが、やはり呻き声一つ立てない。すると大王は鬼どもに二匹の馬を引いてこさせて、鞭で打たせた。馬は杜子春の父と母だった。鞭で打たれて馬は肉が裂け骨が砕け、息もたえだえに倒れてしまふ。「私たちはどうなつてもよいから黙つておいで」——一匹の馬がそういうのを聞いて、杜子春は思わず「お母さん」と叫んだ。

気がついて見ると、杜子春は洛陽の西の門の下にいた。「どうだ、とても仙人にはなれまい」と仙人がいった。「なれません。鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」杜子春がまだ涙を浮べたままそういうと、仙人は「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思つていたので」といつて立ち去つていったが、急にまた足をとめて杜子春を振り返り、「泰山の麓におれの家が一軒あるから、それをお前にやろう。今頃はちょうど家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、愉しそ

うにつけ加えた。

肉親の愛にうちかつことはむずかしい、というテーマは同じなのだが、「杜子春伝」の方は、煩惱^{ぼんのう}絶ち難しと杜子春をつきはなしているのに対して、「杜子春」では、肉親の愛にうちかてなかつた杜子春を、それでこそ人間なのだとあたたく救い上げてゐる。

(作家・中国文学者)

既刊 近代作家研究アルバム 芥川龍之介

アルバムⅡ 葛巻義敏構成 研究Ⅱ 吉田精一編

人と芸術 芥川龍之介の人と作 室生犀星／他

作家論・作品論 芥川龍之介 正宗白鳥／芥川の嘘

と真実 広津和郎／敗北の文学 宮本顯治／他

追憶・隨筆 芥川龍之介を憶ふ 佐藤春夫／他

年譜 参考文献目録 四六判函入 定価六二〇円

森 鷗外全集 新装註解 全八巻 監修 吉田精一

新装註解「芥川龍之介全集」は多方面からの強い支持を得て完結いたしました。このたび同じ趣旨により引き続いて新装註解「森鷗外全集」全八巻を刊行することに致しました。御支援下さるようお願い申し上げます。

第一回配本 四月十八日 第一巻「小説一」 三九〇円